
魔法少女リリカルなのは～転生されちゃったよ。剣士と騎士が～

カイクウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜転生されちゃったよ。剣士と騎士が〜

【Nコード】

N3175Y

【作者名】

カイクウ

【あらすじ】

ある日零式の話をしていた少年達。すると、落とし穴に落ちて気絶しちゃった！！気がついたら赤ん坊からリスタートだとさ。ゲヘツミ。しかも転生されたさきは・・・魔法の世界だって！意味わかんね〜。これはとある少年たちの話である。脚注、この話は駄文です。天の声がいます。二人ぐらいで書いてます。そこんとこ4649。そしてこれはもしあなたが、アルバス・ダンブルドアはセブルス・スネイプに殺害されることや、上条当麻に説教されて殴られた男は女の子とフラグを立てる「カミヤン病」に感染するこ

とや、御坂美琴は妹達を助けるべく自殺しようとして上条当麻に説教されて止められることや、古泉一樹は機関のリーダーであることや、ドルアーガを倒さずにドルアーガの塔の60階に行くとZAPで1階に戻されてしまうことや、アポロがアポロニアスの生まれ変わりで太陽の翼であることや、NESシリーズは本編ではそんなに活躍しないことや、勇者バトルはあらかじめ空導王アンブラスⅡガエアによって仕組まれていたことや、ケビン・スペイシー（犯人）の証言は全てその場の思いつきであることを知らないのであれば、充分注意して、うわなにをするやめ」

第一話〜転生だよ!!全員集合!!〜 (前書き)

あれだね。 FFXだね

第一話　転生だよ！！全員集合！！

とある少年たちの会話の会話

「あー・・・だるい・・・」

「そうだなー・・・」

赤髪の少年と銀髪の少年がいかにもだるそうに話をしている。
なんか歩幅も狭いしね。

「あー・・・そういやさ。こないだ零式買ったのよ」

「え！？いいな・・・どうだった？」

「いやあれマジ面白いぜ！！やばいから！！神ゲー神ゲー！！」

「僕、日本のゲームってあんまやらないんだよね・・・けど、零式は外国でも騒がれてるらしいけどね。僕の父さんが買った」

「ふん……じゃあお前の父さんにやらしてもらえよ。零式」

「いや、父さん、すごい零式気に入っちゃってさ。やらない日は五百重金庫にボディガード二人つけて保管してるんだよ」

「いや、もはや国宝なみの扱いだね。零式。てかお前の家、どんな家だよ」

「父さん、総理大臣だからね。」

「変わって」

「いろいろ大変だよ？僕の家」

「いろいろって？」

「24時間勉強勉強」

「じゃあ無理だ。俺勉強とアルコールは苦手だから。やったら幻覚見ちゃうもん」

「……大変な体質だね」

「ああ……だからしたくてもできないんだよ……勉強」

「」愁傷さま二ノ宮くん」

「誰が二ノ宮だ。誰が」

「そういえば最近お父さんがアニメのDVD買ってきたんだよ」

「何の？」

「なんだっけ？・・・魔法少女・・・リリカル・・・な

」

銀髪の少年がなのは、と言いかけた時だった。

急に景色が止まった。正確に言うと、少年達が止まったのだから！

「あれ？地面が無いような・・・」

そりゃそうだろ。だって地面がないんだもの
簡単に言うと、アニメでよくある、落とし穴？

「否・・・これは・・・」

「空間がわれてるがな」

「(m・ω・)(m」

「ねえ、僕たちこれからどうなるの」

「多分・・・死ぬ？」

「(m・ω・)(m」

•
•
•

「やだあああああ・・・」

こうして少年たちの冒険はこうやって始まり、また多分少年たちの新しい人生が始まります

あ、そうだ。今回からナレーションを務めさせていただきます。

どうかよろしくお願いします

「よろしくじゃねええええええええええええ！」

第二話　目が覚めたら体が縮んでいた！ー！

光太郎サイド

「う・・・・・・・・」

ようやく意識が覚醒。多分病院。取り敢えず体を起こす。

あれ？おかしいな？

力を入れてもう一回

・・・・・・・・あれ？おかしいな？

なんだか力がでないな……

ん？よく自分の体を見てみるとちっちゃくなってるじゃないか

体は子供！！頭脳は中2その名は名探偵「お察してください」ン

いや、くだらない事言ってる場合じゃない。

なんで体がちっちゃくなってるの？

なんでバブー（世界共通語、ウチの保険の先生が言ってたんだから間違いない！）しか言えないの？

なんで今泣いてんの？確かに泣きたいけども！

「それではどうぞ」

ん？誰が入ってきたみたいだな

あ、こっちに向かってきた。なんだ？

あれ？俺の事持ち上げたぞ？

まさか・・・この人たちが

「さて、この子は小竜さんの病室に連れてかないと」

なんだよ・・・看護婦さんかよ・・・はあ・・・
ん？この人の話によると俺の親は小竜っていうのか・・・覚
えておこう

「小竜さん、お子さんですよ」

え、マジで？この人たちが俺の親……

いや……前の世界の俺の親じゃん……

いや違うな……だってなんか若いもん……

「ほーら、パパですよー。ふはははははは」

うーん、父親……らしからぬ笑い方だな……

「ちょっと勇さん。怖がつてるでしょ！」

「ハツハツハ！冗談冗談！しかしあれだな……この子は猿に似てるな」

……だとコラ？糞ジジイ
やんのかおい

「もう！なんて事言っのよー！」

そうだそうだ！なんて事言っんだ！ちょっと顔がいいからって酷くねーか！？

「冗談冗談！ところでこの子の名前は何にする？」

「そうね・・・・・・・・剣心なんてどう？」

「いや、るる剣はやめよう」

おい！お前はどこの比古清十郎だよ！！
ってなにこのマイナーなツッコミ！！

「うゝん・・・・・・・・海賊王^{ルフィ}は？」

「やめよう。勘違いされるから。看護婦さんに」

だからお前はどこのギャルだよ！！どこの！！

「えゝ・・・・・・・・じゃあゝ」

頼むよ俺の母親

頼むから漫画のキャラはやめろ！！

「じゃゝあゝ・・・・・・・・光太郎！！！」

「光太郎？」

「……真っ暗な人生をおくるより……明るい人生を送って欲しいから!! どうかね!？」

「……うん、いいな……本当は一護とかそういう名前が良かったけど!」

「好きなんだね。BLEACH」

小竜……光太郎……前の世界とは違う名前だけ……

そういう……意味込めてたんだ

俺の名前って……

俺の親・・・・・・・・この世界の俺の親・・・・・・

前の世界では物心着く前に死んじゃったから

この世界の俺の親がいい人でよかったな

「ほゝら。お母さんですよゝ光太郎ゝ」

「あ、光太郎今笑った」

「ふふ、かわいいね」

「そうだな・・・・・・・・立派に育ってくれよ！光太郎！！」

母さんは俺の事を抱き上げてくれる

なんだか・・・・・・・・暖かいな

この世界に転生して・・・・・・・・よかったの・・・・・・・・かもな

この人たちに、迷惑かけないようにしねーと……

「これからよろしくね！光ちゃん！」

「光太郎！よろしくな！！」

こちらこそ……よろしくな

俺の母さん、父さん

いじねから・・・ゆづく

第三話　目が覚めたら以下同文

グラムサイド

「.....」

目が覚める。眩しい。おそらく病院だと思う。多分……

「あー……あーうー……」

おかしい。おかしいぞ。何故普通に言葉が出ないんだ？

よし、もっかいトライしよう。

「あー……あー……うー……！」

病室に僕の声が響く

僕は必死こいて叫ぶ……が、意味なし。

よくよく考えたら目線が低いような気が……

・
・
・
・
　ってあれ？手がちっちゃいな・・・まるで赤ちゃんのような・

赤ちゃんのような？

つて今の僕の姿……

「ああゝ！！ああうゝうゝ！！（なんだこれえええええ！！なんで赤ちゃんになつてるのおおおお！？）」

赤ちゃんになつてるせいかな言語もあゝとうゝしか出ない…………

…………さらに僕の周りはガラスの牢獄…………

見て！！この地獄の三連コンボ

波○拳↓昇○拳↓竜巻○風脚のようなコンボ（カ○コンのみなさん本当にありがとう）

ごホン！！…………冗談はこれくらいにして…………

今の状況を簡単にいえばさっきまで中学二年生の体だったのになぜか今は赤ちゃんの体になつてるっていうこの状況

つまり…………人生リスタートという訳である

しかし…………このガラスの牢獄…………確か未熟児が入れらるんだよね…………

じゃあ僕、未熟児？オーマイガー

そんなことより僕にはもっと大事なことがあるじゃないか

・・・肝心の僕の親はどういう人なんだろう？という普通の日常だったら絶対遭遇しない質問

これである

いやまじでパンチパーマかけてるお父さんとか GANGRO なお母さんとか嫌だよ〜

普通の親でありますように・・・

「それではどうぞ〜」

わっ！来た！！

うわっ・・・・・・・・パンチパーマのお父さんとガングロメイクのお母さんだ・・・・・・・・

最悪だ・・・・・・・・もうだめ・・・・・・・・死にたい・・・・・・・・

・

こっち来ないでよ・・・・・・・・

「うわっ！まじ超可愛くね！？」

「やばいんじゃない？こいつまじ可愛いですけど！海賊王^{ルフィ}って名前にしようぜ！」

「いいね！それ」

そういつて二人のヤンキーは赤ちゃんを連れて病室から出ていく

よかった・・・・・・・・僕の親があんなのじゃなくて・・・・・・・・

そしてあの親の赤ちゃん・・・・・・・・同情するよ・・・・・・・・

あ、次来た

「うわゝウチの子かわいゝ萌えゝ萌えゝ」

「うわゝ男の子でよかった」

うわ、気色悪っ！何この親二人揃って愚の骨頂！！鬼畜の所業！！

こうして腐った人類が増えていくのか…………くわばらくわばら

あ、また来た

「…………あれ？僕は何をしにきたんだっけ？」

……………帰っちゃったよ……………

どうやら３歩歩くと記憶無くしてしまうらしい．．．．．かわい
そうに．．．．．

こうして変な親が三十人くらいこの病室に入ってきたがその後何
時間も待ったが僕の親は来なかった

（おかしいなあ．．．．．子供が生まれたら様子を見に来るとかする
んじゃないのかな．．．．．）

すると一人の帽子をかぶった老人が現れて、看護婦さんに話をし
にきた

さらにこのおじいさんは僕のほうに向かって歩いてくるじゃない
か！！

「この子が大統領のご子息様ですか．．．．．グラム・オーディン
という名を大統領から預かっていますが．．．．．なんともかわい
らしい．．．．．」

え・・・・・・・・大統領の・・・・・・・・息子・・・・・・・・？

嘘だあああああああ！！嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
だ嘘だ・・・・・・・・嘘だ！！

「さて・・・・・・・・いきますよ。グラム様」

え、やめ！やめ！！連れてかないで！！つれてかないでよ！！お願いしますから離してえええええええ！！！！」

が僕の（心の）叫びはむなくこのお髭が素敵なご老人につれてかれ、無茶苦茶でかいリムジンに入れられ、無茶苦茶でかい豪邸に連れてかれたんだな・・・・・・・・と僕が感傷に浸るまで・・・・・・・・三時間後・・・・・・・・

第三話　目が覚めたら以下同文（後書き）

次はあれだ。あの・・・・・・・・光太郎が四歳くらいのときの話ですね

第四話　いつかの出来事（前書き）

めちゃ短いです

第四話 いつかの出来事

前回、目が覚めたら俺は赤ちゃんになっていた
しかも俺は小竜さんちの光太郎君っていうのだからまあ、驚き

そして月日は・・・・・・・・二年たった・・・・・・・・

「こうちゃんが立って歩くようになってから四ヶ月……か」

32

「そしてオレらの事をパパ、ママっていうようになってから……
・四ヶ月……か」

そうなんだよね……

俺がこの世界に転生されてから二年経つんだよね……

しかも不思議なことに月日が立つことにこの世界に来る前の記憶が消えていくんだよね．．．．

忘れるんじゃないくて、消える

だからもう二度と思い出せない．．．．

悲しいような．．．．うれしいような．．．．

そりゃ、楽しい事も忘れちゃうけど．．．．悲しい事もなくなるからな．．．．

ま、いつか。二度と元の世界に戻る事はできないだろうけど．．．．

けど．．．．忘れちゃうのかな．．．．あいつのことも．．．．

今は名前も．．．．あいつのとの思い出も消えちゃったけど．．．．あいつの顔とあいつと親友だったってことは覚えてる

死んだ人の記憶はなくなるって言うけど．．．．あいつの事を覚えてるってことは．．．．

あいつも・・・・・・・・この世界のどこかで・・・・・・・・

「ヘクチュン!!」

「おや？グラム様。風邪ですか？」

「あ。うー！（誰かが僕の噂してたんだ！爺）」

「うむ……。そうか。ミルクが欲しいのですか！それでは今しばらくお待ちください」

「あゝあゝ！（爺……。違っっては……。）」

「それにしても……昔の勇さんにそっくりね」

「そうか？俺は魅音の子供の頃に似てるけと思っけどな」

マジか！？母さんの小さい頃って俺に似てるんだ！！って俺が母さんに似てんのか…………

「これから…………光太郎はどういうことになるんだろうな」

「あなたみたいに身体能力がすごい子だったりして」

「ハハ。そうであつたとしても…………俺と同じ道は通って欲しくないな」

「言わないで。私たちは…………やめよう…………この話は」

「そうだな…………もうあつちの世界とは違つからな」

？？どういうことだ？

あつちの世界ってどういうことだよ…………あ…………！！無茶苦茶気になる！！

それに…………父さんがこの話を使用した時の母さんの顔…………

二人に……何があつたんだよ……

あ~~~~無茶苦茶気になる!!

「あ~~~~う~~~~!!」

「あら?どうしたの?こうちゃん」

「きつとミルクが欲しいんだろ。待ってる!父さんが今作ってやるからな!!」

「あら?あなたおむつを変えるのもできないのに、牛乳を哺乳瓶に入れるなんて出来るのかな?」

「当たり前だろ!これでも昔はキングの二つ名を持ってたんだからな!!」

「その名前。懐かしいね」

「ああ．．．．シドに龍華に燐．．．．あいつら何やってんだろうな」

「そんなことより！ミルク、ミルク！」

「ああ、そうだったな！待ってる！今持ってきてやるからな！！」

．．．．まあ、前の世界よりは．．．．今の世界のほうが楽しいな！！

さあて．．．．これからを楽しみましょうかね！

第四話 いくつかの出来事（後書き）

はあ・・・辛いですね・・・

この話は光太郎君が前の世界の記憶を持っていた、最後のときの話ですね

次回から光太郎君の記憶はなくなっちゃうからもう、中2の思考ではなく三才の思考ですので。あしからず

第五話　入園式前！！

桜道・・・

「父さん！早く早く！！」

「ハハッ。光太郎！ちょっと待ってくれよ」

「ほらほら。勇さん置いてかれちゃうわよ？」

「わかってるって！」

「もう父さん！！早く！！」

「分かった！分かった！」

今日は光太郎君が通う幼稚園の入園式です

三年前まで中学二年生だったのが今は三才の幼稚園児に

何故こんなことになったのか

理由は簡単。彼の親友と道端で話をしていたとき、急に出来た落とし穴に引っかけちゃって、それでこの世界にテレポ~~~~シヨン！！しちゃった…………というわけなんです。

それで今の光太郎君の転生されてきたときはまだ前の世界の記憶はあったけど今は……………っていう状況

話を戻しましょうか。

それで今日は彼の入学式

桜の綺麗な四月き

彼の心は希望に満ち溢れていました

「父さん！！すごいね！！この花！！いっぱい落ちてくるよ！！！」

「光太郎。それは桜って言う花なんだよ。春になるとこつやって綺麗な花を咲かせるんだ」

「へっ………すげっ………」

今の光太郎君は昔の光太郎君と違って三才の男の子だからそういうことも忘れてしまったんですね

しかし、記憶を消去してしまっても、親友であり、一緒にこの世界に来た、「彼」の存在は忘れていませんでした

「ねえ、父さん！今日夢見たんだ！！！」

「ん？どんな夢だい？」

「俺がちゅうがくにねんせいになって、ともだちができる夢！！」

「へっ……そうなのか。幼稚園に入って友達ができるといねっ」

「うん！！友達百人作るんだ！！」

「へえっ……百人作れるといいな！！」

「作れといいんじゃない、作るんだよ！！」

「ハハッ！そいつはごめん！」

どこからどう見ても平和な家族の風景
しかし、これから起きる少年の未来は
しなく壮絶な戦いだった

果て

第五話　入園式前！～（後書き）

うん・・・・・・・・微妙だな・・・・・・・・

次回！！なのはちゃん！！と光太郎が出会っちゃう！？

お楽しみに！！

第六話　はじめての友達！高町なのは！ってこの子は・・・

入園式　・・・

「幼稚園に入学した皆さん！！こんにちわ～～～」

こんにちわ~~~~~!!

さっすがに子供たちは元気の塊である

元気が一番！！ありさんマークの引「お察してください」です！！

（うわゝ・・・・・・・・なんか緊張するな・・・・・・・・友達できるかな・・・・・・・・ん？）

光太郎君は隣の少女をみる

髪は茶色のツインテール、名札には「たかまち　なのは」と書いている

あれゝ？おかしいな？とお思いの読者様はお察してください

（この子なのはっていつのか・・・・・・・・友達になれるかな？）

「ん？どうしたの？」

「え？えつと・・・・・・・・あのさ。名前なんていつの？」

（いやだからなのはって書いてあんじゃん！！苗字は漢字でわからないけどなのはって書いてあんじゃん！！）

と一人ツツコミする光太郎

「高町なのはだよ！」

「なのはっていうんだ……俺、小竜光太郎！！よろしくな！
なのは！」

「しょうりゆうこうたろうか……かつこいい名前だね！光
太郎君だから『コウちゃん』だね！」

「こ、コウちゃん！？」

「え……だめ……かな？」

幼稚園児の汚れの無い上目遣いにやられた光太郎選手！！KOです

「う……うん！いいんじゃないの？けど、あんまり人前で言
わないで欲しいんだけどな……」

「うん！分かった！！」

本当に分かったんだろうか……この少女は
三年前の光太郎ならこう思ってることだろう

「それじゃよろしくね!!」コウちゃん!!」

「うん!よろしく!!なのは」

こうして「高町なのは」「小竜光太郎」二人の間に絆が生まれた

それはまだ幼いものだが、いつしか誰にも断ち切れないほどの強さになることだろう

その後、勝手にしゃべっていた光太郎となのは先生に見つかり、しばらくお説教をくらいましたとさ

第七話　　なんだかんだで小三に．．．．．（前書き）

はあ．．．．．やっと本編に入ります

疲れた．．．．．

第七話　　なんだかんだで小三に・・・

光太郎 s i d o

—————
~~~~~  
—————

「あ~~~~・・・・・・・・・・うるせーな・・・・・・・・・・」

~~~~~

「もっ少しねかせろ・・・・・・・・・・ZZZZ」

~~~~~

「・・・・・・・・・・」

~~~~~

「いんちき・・・・・・・・・・」

~~~~~

「言ってんだろぅがぁぁぁ!」

——ゴゴゴゴゴゴダガシヤアアアアン——

「……………」

やっちまっ たよ……………」

今俺は何をしたかというところさ目覚まし時計をぶちこわしたのだよ。蹴りで

ちなみにこのことはうちの親などに言わないで欲しいんだけどな……………」

「お兄ちゃん?何があったの?入るよ」

やべっ…………

「あ————!!お兄ちゃんまた目覚まし時計壊したでしょ!!」

「うるせえな…………ピーピーピーうるせーから壊したよ!」

「うるさいのは当たり前でしょう!!目覚まし時計なんだから!!」

「知らんわ!!そんなもん!」

はぁ…………一番めんどくせえ奴に見つかったよ…………

こいつは俺の妹。小竜梓

こいつのことあずにゃんって言ったら承知しねーから

「で、なんのよう?もしかして飯?」

「あ、うん。ご飯出来たからって、お父さんが」

「あゝ、そう。てか今何時?」

「朝の八時だけど」

「あ……そう……ってええ!？」

「どうしたの？お兄ちゃん」

「今………なんて？」

「朝の八時」

やばい

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ  
イヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバ  
イヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバ  
イヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバ

「遅刻するうううううううううう！！」

「え、今更!？」

「今更とか言うなあああ!!」

とにかくにも私、小竜光太郎、小学三年生  
遅刻というピンチに陥っておりますとさ

「オヤジiiiiiiii!!おはよう」

「おう。おはようさん」

この人は俺のオヤジ。小竜勇

寿司屋「寿」の板前店主

特技は剣道と包丁さばき

十秒でマグロの握り、百貫つくとか

まあ、現場を見たことがないからわかんないけどさ

「あれ〜？光ちゃんおはよう〜」

「あ、母さん。おはよう」

んでこののほほんとした人は俺の母さん、小竜香織  
寿司屋「寿」の女将さん

得意技は香織チョップというなんともほほんとしたネーミング  
センスだが一発で熊一頭を討伐できるとか。真偽は知らない

「あれ？光ちゃん、ご飯食べていかないの？」

「食う時間あると思いますかねー！？」

「ほれ、光太郎、弁当」

「おっとつと、サンキュ！」

「お兄ちゃん！なのはさん来てるよ！！」

「え、あいつ早っ！！」

「」「お前が遅いんだよ！！」」「」

「もっともでございます……………」

「んじゃ、いつてきまゝす」

「気をつけてね」

「今日も寿司な」

「またかよ！！」

「お兄ちゃん、お土産よろしく！！」

「金ねーよ！……あ…………でもできたらな」

というわけで……俺の一日が始まるわけなんですが……  
・おっと、まだ自己紹介がまだな奴がいたな

---

ガチャ

---

「おはよう！光ちゃん！」

「おはよう、光太郎」

「おう。オッハー」

俺の幼馴染の高町なのは

職業は小学生と魔法使い

そんでこっちのペットのしゃべるフェレットはユーノ

俺の……まあ、友達だ

「ほら！早くいかないとバス行っちゃうよー！」

「分かつとる！ダッシュで行くぞ！！」

「あんまり早く行きすぎると朝食食べたもの戻しちゃうよ？」

「食ってねーから大丈夫だ〜」

「いや、そういう問題じゃないけどさ……………」

ちなみに俺の名前は小竜光太郎

訳あって、迦楼羅と呼ばれる「不死鳥」と契約させられて魔剣士になっちゃったかわいそうな小学三年生〜って感じかな

まあ、理由は……………三日前に遡る

## 第八話〜三日前〜

光太郎 side

それはまじで突然な出会いでした

「ただいま………って、母さん？」

俺の名前は小竜光太郎。私立聖祥大附属小学校三年生だ  
そこでここが俺の家、寿司屋「寿」

週末にはかなりの人が来る、かなり人気な店だ

ちなみになのはんとこの家族も常連である

「あんれ〜？いねえな……ん？なんだこれ」

テーブルの上においてある一枚の置手紙  
そこにはこう書いてありました

『光太郎へ。お母さんとお父さんは仕事で調理する魚が無くなったので海に捕ってきます。明日までには帰ってくるので夕飯は梓と済ませること』

そして置手紙の裏には一万円が貼り付けられていた……

「まじか……うわ〜〜めんどっ」

——トウラララントウララランランラン——

すると俺のケータイの着信音が鳴り響いた。曲は仮面ライダー電王のモモタロスが変身するときの音

「はい、もしもし？」

『もしもし、お兄ちゃん？』

「ああ、梓か」

『今どこにいるの？』

「店」

『いやどこの？』

「近所の」

『近所のどこ！？』

「すぐ近く」

『店名は！？』

「寿司屋『寿』」

『家じゃん!』』

すごくね?ここまで引つ張ってこれたんだぜ?

『もう!最初っから家って言ってよ!』』

「ハハハ!悪い、で用件は?」

『えっと、今日塾が少し長引いちゃってね、それで、お兄ちゃんに先ご飯食べてって連絡したの』

「えゝ・・・・・・・・まじか・・・・・・・・今日俺一人で飯食うのかよ・・・・・・・・」

『え、今日お母さんたちいないの!?!』

「うん。釣りいった」

ちなみにうちの店は市場で魚を買ってくるんじゃないで、海にい

って釣ってくるんだよね

こないだなんかマグロを三疋釣ってきたんだよ

『そっか……ごめんね』

「別にお前が悪いんじゃないからあやまらなくていいさ。それに飯  
だったらなのは母さんが差し入れてくっから大丈夫だろ」

『うん、わかった。それじゃあ切るね?』

「ああ。塾がんばれよ」

『うん、ありがとう』

——ピッ——

はあ……一人で飯食うのか……さびしい

——ピンポーン——

店内に響く、インターホンの音

まさか！！なのはか！！

「イアッホオオオオイイイイ！！今いつきまゝす！！」

なのはの料理が待っているため、俺は廊下を駆け抜ける！！  
そうさ、財宝はすぐそこなんだああああああああああ  
ああ！！

「はい！なんゝでゝすか？つて……………」

ガラガラと引き戸を開けるが、なのはの姿はどこえやらあるのは  
一本の刀だった

「……………はあ……………」

テンションがた落ち……………

「なんだ？この刀……………誰かが置いていったのか？」

誰かが俺の家のインターホンを鳴らし、そして刀を置いてどこかへ去った……という俺の推理  
あながち外れちゃいねーだろ

「とりあえず……これは持つてくか」

そついうわけで俺は刀を取り、そのまま家に入った

そして引き戸を閉めたたん、何か背筋が凍るような感覚がした

「っ！……なんだ？」

——トウラララントウラララランランラン——

「はぁ………いつたい誰だ？」

——ピッ——

『光ちゃん!!今どこ!?!』

「どこって………今店『キャアアアア!?!』ど、どうした!?!」

『こ、光ちゃん!!なるべく、なるべく遠くに逃げて!!!』

「ど、どういうことだ!?!説明を——」

——ギヤアオオオオオオオオオ——

ケータイにから大音量で出る、化け物の悲鳴  
それはおぞましく、背筋が凍るような声だった

「な、なんだ？今の」

『もしもし！君が光太郎君だね！？』

「だ、誰だ！？」

『自己紹介は後だ！！今から言うことをよく聞いて！！今僕たちが戦っている相手は君の家がある方向に向かっている！君は家族を連れてできるだけ遠くに逃げるんだ！！』

「あ、あんたらは！？」

『僕たちはなんとかしてコイツを食い止める！！だから君は逃げ、ざけんじゃねええ！！』っ！？』

「僕たちってことはなのはもそこで戦ってたよな？理由は聞かないけど、俺の親友が戦ってるのに自分一人だけのこのこと逃げられつかよ！！俺も行く！！」

『ちよっ………待っ』

——ピッ——

「さて……あそこか!」

俺はなのは達が戦っている場所に向かって走り出した

いてもたってもいられないから全速力、で俺は走り出した

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3175y/>

---

魔法少女リリカルなのは～転生されちゃったよ。剣士と騎士が～

2011年12月2日20時57分発行